

長岡大学ブックレット 31

長岡大学のグローバルスタディ

—21世紀の基盤精神「グローバルマインド」を身につける学習プログラム—

— 目 次 —

1. はじめに～21世紀の基盤精神「グローバルマインド」
2. 「グローバルスタディ学習プログラム」の基本設計
3. 長岡大学の「グローバルスタディ科目群」
4. グローバルスタディの事例



NAGAOKA
UNIVERSITY
BOOKLET

長岡大学ブックレット刊行にあたって

平成22年1月

長岡大学長 原 陽一郎

長岡大学は開学9年目の平成21年度に、自己評価報告書（『長岡大学自己評価報告書』は本学ホームページに掲載）にもとづいて、財団法人日本高等教育評価機構による第三者評価を受けました。大学全体として高く評価されたと思います。私は、平成16年4月に長岡大学第2代学長に就任し、以来、大学改革を進めてきましたが、その改革の成果が認証評価をもたらしたものと考えております。

この5年間、地域の経済経営系の大学として、地域社会で実際に役立つ人材の育成と就職率100%をめざして、まず、建学の精神と大学・学部の使命・目的を次のように、明確にしました。これは、自己評価報告書に明記されています。

☆建学の精神

長岡大学の建学の精神は、長岡大学を設置する学校法人中越学園の起源である「斎藤女学館」の創設者である斎藤由松先生の教育観と、本学の前身である長岡短期大学の建学の精神を継承したものです。

- ・幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進
- ・地域社会に貢献し得る人材の育成

☆大学の使命・目的

- ・広く豊かな教養を授けるとともに、深く専門の学術を教授・研究し、実践的、創造的な能力を備えた有為な人材を育成して、人類の福祉と文化の向上に貢献すること

☆経済経営学部の使命・目的

- ・長岡大学は「ビジネスを発展させる能力と人間力を鍛える大学」です
- ・長岡大学は、学生に「毎日の大学生活で充実感を、能力アップを確かめて達成感を、卒業のとき4年間を振り返って満足感を」実感させます

同時に、この目的を達成すべく、本学独自の教育プログラム「産学融合型専門人材開発プログラム－長岡方式－」を平成17年度に開始しました。幸い、このプログラムは平成18年度の文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」＝現代GPに選ばれ、そして、翌平成19年には「学生による地域活性化提案プログラム－政策対応型専門人材の育成－」が同じ現代GPに、「長岡地域産業活性化のためのMOT教育『イノベーション人材養成プログラム』」が文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に、選ばれました。これら3つのプログラムの採択による豊富な助成金を活用することにより、教育改革を進めて、本学の教育力を飛躍的に向上させることができたと思います。本ブックレットシリーズはこの本学の教育の実態と成果を、地域社会の皆様や高校生諸君に知っていただくために刊行してきましたが、25号を数えるまでになりました。

しかし、改革当初の目標（就職率100%）は未だ達成できておりません。そこで、平成20年5月に長岡大学教育改革第2次戦略「就職力ナンバーワン計画」を策定、教育力を就職力にまで高めて目標の達成を目指すことにしました。平成21年8月に、本学の学生の就職力形成をめざす「学生の3つの就職力一体形成支援プログラム」が文部科学省「大学教育・学生支援推進事業」（テーマB：学生支援推進プログラム）に選ばれました。本学はこれを契機に、まさに第2次改革戦略の時代に入りました。長岡大学は教育力－就職力の耐えざる練成・向上により、厳しい経済・人材市場を生き抜き、地域社会に貢献できる若者人材を育成し続けます。本学は、本ブックレット・シリーズを通して、本学の教育力－就職力の実態と成果を引き続きお知らせする決意であります。ご期待ください。



長岡大学は、文部科学大臣が認証する財団法人日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価を受け、平成22年3月24日付で、「日本高等教育評価機構が定める大学評価基準を満たしている」と「認定」されました。認定期間は、2009年4月1日～2016年3月31日です。

長岡大学のグローバルスタディ

－ 21 世紀の基盤精神「グローバルマインド」を身につける学習プログラム－

長岡大学教授 広田 秀樹
長岡大学准教授 権 五景

1. はじめに～ 21 世紀の基盤精神「グローバルマインド」

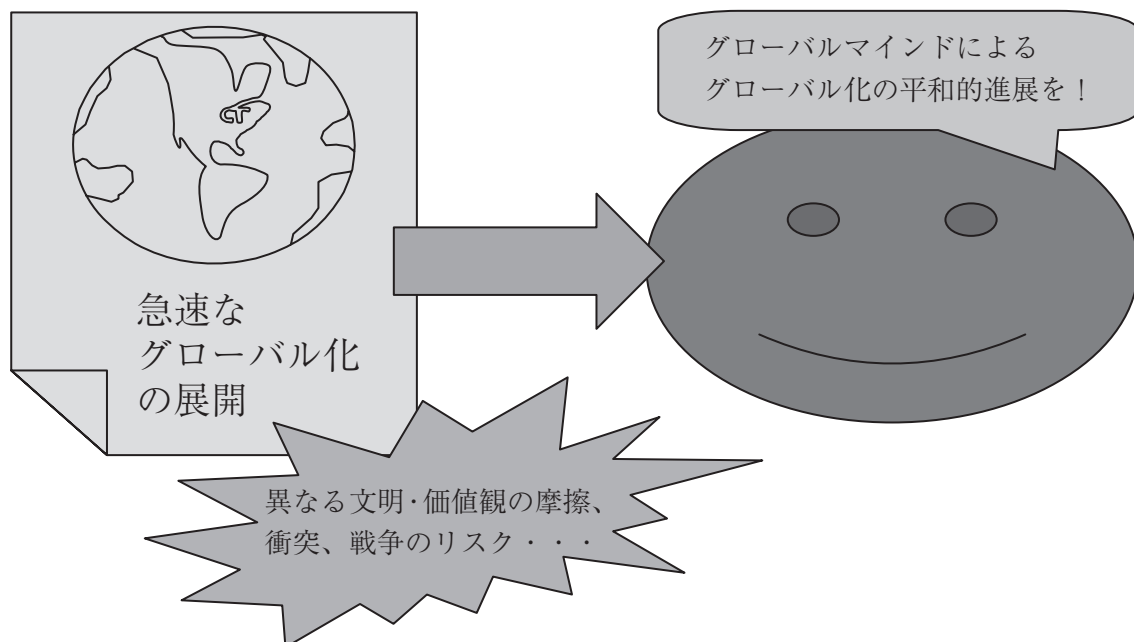
現在はグローバル化（地球一体化）が急速に進み、世界中のモノ、資本、情報等がダイナミックに地球上を駆け巡っている。人間の交流も活発になっている。年間、約6億人の人が国境を越え移動し交流している。グローバル化の時代にあっては、自分にとって全く未知な異質の文明・文化・価値観とのグレートエンカウンター（大いなる遭遇）が、日常的な出来事になっていく。それは、刺激に満ちた素晴らしいことである。

しかし一方で、グローバル化は多くの悲劇をも発生させている。特に、いわゆる文明間・文化圏の間で生じる摩擦、紛争、戦争は深刻である。結局、異質な文明・文化・価値観等をよく知ろうとせず、一方的な先入観、奇異、警戒、敵対意識といったネガティブな感情を心に抱くことが、世界各地における摩擦、衝突、軍事的緊張、状況によっては戦争にまでいたる遠因となっている。

自分にとって異質と思われる他国の歴史、文化、現状、価値観を積極的に学習する中で、そこに生きる人間の現実を理解し、同じ人間として共生していこうという精神が醸成されることのみ、グローバル化は平和的にランディング（着陸）することができる。世界の多様性を理解し同じ人間として共生していこうというグローバルマインド（Global Mind）の世界的醸成は、今後の人類史上の最重要課題であると言える。グローバルマインドが21世紀の地球社会（Global Society）の基盤精神になることを願う人は多い。

長岡大学では、グローバルスタディという科目を設置し、学生にグローバルマインドを身につけてもらう教育を展開している。

図1：グローバル化とグローバルマインド



2. 「グローバルスタディ学習プログラム」の基本設計

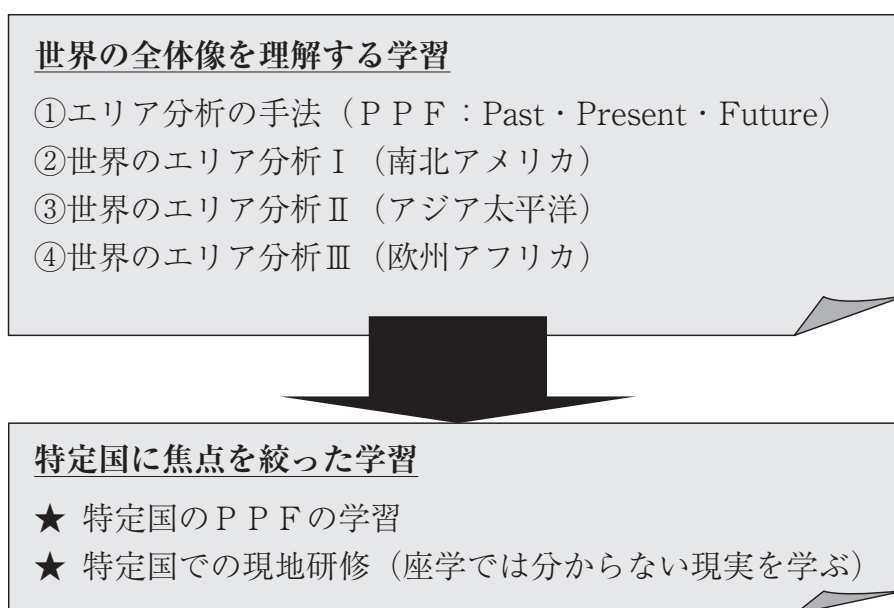
長岡大学では、複数のグローバルスタディ科目を具体的に組み立てる上でのガイドラインとなる「グローバルスタディ学習プログラムの基本設計」を、以下のように構築している。すなわち、第1に「世界の全体像を理解する学習」、第2に「特定国に焦点を絞った学習」である。

「世界の全体像を理解する学習」とは、全世界の概要、その多様性を理解する学習である。ここでは、最初に世界の各エリアを分析する手法であるPPFを学習する。PPFとは、海外各地のエリアをPast（歴史）・Present（現在の状況）・Future（未来）の視点から包括的に分析する手法である。PPFの手法をマスターした後に、世界を南北アメリカ・アジア太平洋・欧州アフリカの3極に大別して世界の全体像を学ぶ。

「特定国に焦点を絞った学習」では、海外の特定の国に焦点を絞り、その国のPPFを学び、さらに座学では知ることができない特定国の現実を、その国での現地研修を通じて学ぶというものである。

長岡大学では、「グローバルスタディ学習プログラムの基本設計」を基軸に、具体的に「グローバルスタディ1」・「グローバルスタディ」という2つの正規科目を設置し、毎年、学生を海外に送り出すことに成功している。

図2：グローバルスタディ学習プログラムの基本設計



3. 長岡大学の「グローバルスタディ科目群」

長岡大学では、グローバルスタディの正規科目として、教養科目の中に、1年生以上が履修可能な「グローバルスタディ1」と、2年生以上が履修可能な「グローバルスタディ」を設置している。

「グローバルスタディ1」は、日本から比較的近い海外地域での現地研修を含むもので、現在、韓国コース・中国コース・グアムコースがある。「グローバルスタディ」は、アメリカ合衆国本土・ヨーロッパ等、日本から遠距離にある海外地域での現地研修を学習内容に取り入れているものである。

表 1：グローバルスタディ科目群

科目名	現地研修エリア		履修対象学年	単位数
グローバルスタディ 1	韓国コース	韓国	1年生以上	2
	中国コース	中国		
	グアムコース	アメリカ合衆国領グアム		
グローバルスタディ	アメリカ合衆国本土・ヨーロッパ		2年生以上	2

グローバルスタディ科目群では、共通の基本学習プログラムを形成している。全てのグローバルスタディ科目では以下の基本学習プログラムを実施することになっている。

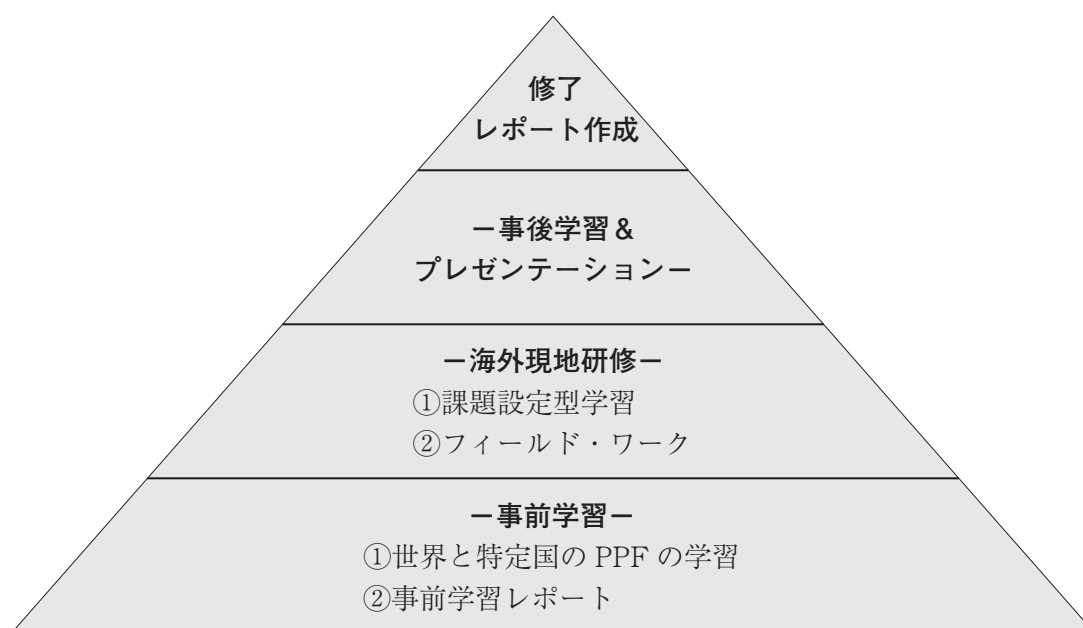
第1に、徹底した事前学習である。事前学習は、夏期の現地研修の前に設定されるもので、講義形式・ディスカッション形式で行われる。事前学習では、世界の全体像を理解するために各エリアの概要を学び、そして科目が設定する現地研修対象国のPPFを学習する。事前学習の最終段階には、学んだ専門知識等をまとめる事前学習レポートが課され、履修学生は5,000字以上のレポートを作成する。

第2に、海外現地研修である。海外現地研修では、各グローバルスタディ科目が設定する現地研修対象国に乗り込み、座学では認識できない世界の「現実」を知ること努める。現地研修に際しては、渡航前に明確な課題設定を行う。どのようなことを調べ、確認、考察するかといった課題の設定である。

第3に、現地研修からの帰国後の事後学習と、プレゼンテーションである。事後学習では現地研修から学んだ知識の確認を中心に行い、プレゼンテーションは現地研修の内容を中心に、他の学生に報告するものである。

第4に、修了レポートである。履修学生には、10,000字以上の修了レポート作成が課される。

図 3：グローバルスタディ科目群の共通基本学習プログラム



4. グローバルスタディの事例

4.1 アメリカ・カリフォルニアへ！：2007年度実施「グローバルスタディ」

2007年度は、アメリカ・カリフォルニアエリアを現地研修対象エリアとした「グローバルスタディ」が開講された。

科目の詳細な学習内容を、共通学習プログラムに沿って、事前学習・アメリカ現地研修・事後学習&プレゼンテーション・レポートといった形で緻密に構築した。すなわち、科目履修者は第1に、事前学習において世界の多様性を理解する学習をアメリカの学習を中心に行い、第2に、アメリカ現地研修に参加することとした。アメリカ現地研修は、①ホームステイでの学習、②シトラス大学での学習、③フィールド・ワークで構成した。第3に、帰国後は、アメリカ現地研修で得た世界の多様性についての理解をさらに深化させるため事後学習を行い、その後プレゼンテーションを実施することにし、第4に、総まとめとして10,000字のレポートを完成させることとした。



－ 2007年度の現地研修対象エリア：アメリカ・カリフォルニア州ロサンゼルス近郊－

2007年度の「グローバルスタディ」を履修し最終合格したのは佐藤辰也君であった。佐藤は事前学習において最初に、世界の多様性を理解するためにエリア分析の手法PPFを学習し、それを実際に応用して世界のエリアを、「南北アメリカ」・「アジア太平洋」・「欧州アフリカ」の3極に大別し学習した。具体的には、南北アメリカではアメリカ合衆国・カナダ・キューバ・ブラジルについて学び、アジア太平洋では中国・韓国・フィリピン・ベトナム・タイ・マレーシア・ブルネイ・シンガポール・インドネシア・オーストラリアについて勉強した。欧州アフリカではイギリス・ロシア・ドイツ・オランダ・ベルギー・ルクセンブルク・イタリア・バチカン市国・スペイン・モロッコ・南アフリカ等のPPFのアウトラインを調べた。

佐藤は各エリアのPPF学習の中で、複数の重要な視点到気付いたようだった。すなわち、特定国が、いかに過去の歴史の蓄積であるPastに規定されるかを理解した。例えば、アジアでもシンガポール、マレーシア、ブルネイといった国が18世紀の世界帝国とも言える卓越した海外統治能力を有したイギリスによって開発された歴史を有する故に、国家発展の物的インフラ、諸制度などのベースが構築され、現在アジアの中でも一定の豊かさを享受できる国になっていること。

また、現在（Present）の制度などが世界において、いかに異なっているかについて理解した。例えば、教育制度の国際比較で、オーストラリアにおいてはTAFE（Technical and Further Education）という制度によって、国民の多くが自分の興味と適性にあった仕事をするために複数回学校でスキルをマスターし、大胆に職業を替えることが可能であるということ。

あるいは、オランダにおいては効果的なワークシェアリングシステムの運営等によって、国民の大半が週30時間労働で週休3日といったゆったりした生活を実現し、余暇に自分の趣味やボランティア活動にエネルギーを傾注しており、国民の生活満足度がとても高く、米国・日本のような強い競争型社会とは別の社会民主主義的社会を実現していることを学んだ。

さらに、世界の未来（Future）についてもよく考えた。例えば、未来の国際社会においては中国の動向が、世界を大きく決定する可能性が強いことを認識した。すなわち、中国はそのGDPを21世紀半ばまでに米国に張り合う水準まで拡大すると予想され、強固な軍事力も有し、何よりも古代の漢、唐、元、明、清などと、世界史上で多数回、世界大国として君臨した歴史力があることを学習した。未来の国際政治経済の基軸は米中関係になることを佐藤は確信し、そのトレンドの中で日本はどのような政策選択を展開すべきかなどについて、自分なりの考えを構築していった。

英語の強化学習も行った。最初にPower Baseという英語学習方法によって、英語の展開力を強化した。Power Baseは英語の言語構造をたった14の公式でシンプルに理解するもので、そこには難解な文法用語も構文解説もなく、ただ14の公式を繰り返し学習する中で英語の言語構造の本質を自然にマスターするというものである。次にステーブ＝トレイシー氏のISF（Initial Sound Focus）という教材を使い、英語の発音、音声キャッチの基本を練習した。ISFは英語の単語・フレーズの最初のサウンドに意識を集中して英語を話し、聞くというもので、アメリカ英語の音の理解には適したものであった。

佐藤にとって一番のパワーアップにつながったのは、アメリカでの現地研修であった。まさに行動の一瞬一瞬、全てが新鮮に感じられ、視野の拡大、パワーアップを実感するものであったようだ。

日本出発は2007年9月1日、アメリカ現地研修の期間は9月2日～9月7日であった。現地研修はカリフォルニア州ロサンゼルス近郊で行われた。現地研修は、ホームステイ、シトラス大学での学習、フィールド・ワークの3つから構成された。

ホームステイで佐藤を受け入れてくれたのはフィリピン系アメリカ人のロマーナ＝アキノ氏だった。アキノ氏は13年前、フィリピンから米国に移住した方で、移住した当初は当然生活が大変であったが、現在はご主人が電気技師として、奥様はガーデニング関係の仕事をして、約200坪の邸宅に住み、所有するクルマは大型車が2台という豊かな生活をされていた。

佐藤は、13年前他国から渡ってきて生活が大変だった移民の方々が、今は成功して豊かな生活を実現していることに、年間70万人の移民を受け入れチャンスを与えているアメリカの国家としてのスケールの大きさのようなものを実感したようだった。

アキノ氏の家には旧ユーゴスラビアからの留学生ダンコ君が暮らしていた。旧ユーゴスラビアは米ソ冷戦体制の崩壊とその後の動乱の中で、国家自体が分裂・混乱・再編したエリアである。ダンコ君は激動の祖国を離れ、力をつけるため米国に渡ってきていた。佐藤は米国滞在中、彼と同室で過ごした。自分より年齢が若いのに大変な苦勞をしながらも、明るく前向きに生き、人生と社会で勝利しようと奮闘しているダンコ君の姿に圧倒されたようだった。

シトラス大学でのレッスンは毎日、午前8時から昼近くまで断続的に行われた。体験型の授業が多かったようだ。特定のシチュエーションを設定して英語を話すトレーニングや、共同して特定のテーマに対する意見を議論して共同の意見を形成し発表するような形式の授業が多かった。

ホームワークもかなり出題され、佐藤は毎日午後の3時間程はホームワーク学習のため、大学図書館で勉強していた。ホームワーク終了後はフィールド・ワークとして、シトラス大学があるグレンドーラ市やホームステイ先のあるコビーナ市を中心に、ショッピングセンター、レストラン、レジデンシャルエリア等を幅広く視察した。佐藤はまず住宅、道路、店、商品、レストランで出される料理など、全てが大きいこと (largeness) に驚嘆したようだ。ありとあらゆるものが基本的に大きく設計されていることが、アメリカ人の思考パラダイムを大きくし、それが独創性につながっていることを発見した。

佐藤は毎日の実体験から、超多民族性という米国社会の特徴も深く理解した。彼がホームステイした家はフィリピンからの移民。同室で過ごしたルームメイトは旧ユーゴスラビアから渡ってきた青年。大学に行けば、ロシア系、メキシコ系、中国系の教員にレッスンを受け、キャンパスでできた新しい友人は、ベルギー人、アフリカ系、韓国系の若者だった。また佐藤が毎日食事をとったレストランはメキシコ人が経営する店で、何回かタクシーに乗って話をすると、ドライバーがニカラグアから移住した人だったり、アメリカの超多民族性を、体験的に理解した。

さらにアメリカのFederalism (連邦制) から発生するエリア上の多様性、ロサンジェルスエリア等の南カリフォルニアの特徴、大統領制による政策転換と市民の生活実感の変化との関係、米国人の空間利用の独自性、歴史、ロサンジェルスエリア独特のハイウェイシステムなどを確認した。



—アメリカ・シトラス大学での佐藤辰也君—

帰国後は事後学習で、アメリカのPPFを深化させ、それをベースにレポートを作成した。また報告会では多くの学生に、現地研修等で得た知識・体験を感動的に伝えることができた。長岡大学の多くの教職員が、佐藤の人的成長に感銘を受けた。「明るくなった。さわやかになった。」「タフになった。対人力、対話力が増したようだ。」「自信をつけたね。」等、佐藤の成長を評価してくれる教職員が多数いた。悪戦苦闘を突き抜けて課題を成し遂げた経験、そこから生まれる精神的強さ、自分はやればできる (“Yes, I can.”) という自信が、佐藤の人格に打ち込まれたことを確信した。佐藤辰也の人的成長ぶりを見て、この科目に参加して最終合格した場合の教育的効果が絶大であることを確信した。特に、超多民族社会でスケールの大きな国であるアメリカ合衆国での実体験は若者を大きくすると思った。



—左から、旧ユーゴスラビアの留学生ダンコ君、佐藤、ホストファミリー・アキノ夫妻—

4.2 アメリカ・ワシントンD. C.へ！：2008年度実施「グローバルスタディ」

2008年度にも、「グローバルスタディ」が開講された。履修者は2年生の大槻翔理・早津裕であった。2008年、アメリカは大統領選挙の真ただ中で、世界から注目されていた。以下のような学習プログラムをたてて進めていった。

表2：2008年度実施のグローバルスタディの学習プログラム

学習目標	
1) 世界の多様性の理解 2) 国際政治経済におけるアメリカのウエイトの変化の探究 3) アメリカ大統領制の学習	
学習の流れ	
1	事前学習（14回の講義）
2	事前学習関連レポート（6,000字以上）
3	－海外現地研修－ アメリカ合衆国ワシントンD. C. エリア 課題：「2008年アメリカ大統領選挙に関する調査」
4	事後学習
5	公開プレゼンテーション
6	レポート作成（10,000字以上）

事前学習では最初に、世界の概略を、南北アメリカ・アジア太平洋・欧州アフリカという3極分類・P P F (Past・Present・Future)の視点から学習した。

次に、アメリカ合衆国のP P Fを緻密に学習し、アメリカの全体像の把握に努めた。Pastとしては1600年代・1700年代・1800年代・1900年代の合衆国の経済・政治を中心とした発展過程、特に1700年代後半の独立時、1800年代中期の南北戦争時、1930年代以降を緻密に学習した。Presentとしては、大規模なpolitical appointeeを基軸に国家戦略を迅速に転換できる独自の大統領制、2大政党制、地域の潜在能力を伸ばしてきたフェデラリズム、経済、政策、多民族性、空間設計の独自性等を学習した。Futureとしては、高度にグローバル化することが予想される世界における米国のグローバルガバナンスについて考察した。

ワシントンD. C.において現地研修を実施した。研修実施日は、2008年9月1日～9月7日。大槻・早津にとっては、初めての海外渡航で、パスポート作成、国際空港での出入国手続き、国際線エアラインの利用、海外でのトランジット、アメリカでの生活、海外視察スキルの習得等の全てが初めてのことであり、全行動の一瞬一瞬が驚嘆の連続で、経験の全てが人間的スケールの拡大につながったようだ。

成田空港からデトロイト経由でワシントンD. C.に飛んだ。ワシントン到着後はDC内でも治安の良いジョージタウンの宿泊先に向かった。同地域は米国でもトップクラスの名門大学ジョージタウン大学を有する落ち着いた学生街で、2人の研修拠点としては最適の場所であった。

現地研修では、以下の学習サブジェクトを中心に研修を展開した。第1に、現地の人々へのヒアリング活動として、世界的注目を集めている米国大統領選挙に関して複数の人々にインタビューを試みた。民主党オバマ候補、共和党マケイン候補の政策等を中心に率直に聞いてみた。大槻・早津が出会った米国人はインド系、パキスタン系、アフリカ系、スパニッシュの中の非富裕層の方が大半だったためか、圧倒的にオバマ支持者が多かった。滞在時は共和党全国大会が開催されていて、2人は宿泊先ではTVの大統領選挙関連番組を毎日視聴していた。事前学習で学習した米国の2大政党制、大統領制、両候補のバックグラウンド等に関する知識が生きた形となった。

第2に、リサーチ活動として事前学習で学習したアメリカの現行国家システムに関連する施設を訪問し膨大な展示・資料等によって、国内政策関連、対外戦略関連の詳細を学習した。国内政策関連では連邦議会・財務省・商務省・労働省・健康福祉省等の各機関を回り、対外戦略関連では国務省・IMF・世界銀行などを訪問した。

第3に、米国のPastの確認として多数の施設・メモリアルを見学し米国400年の歴史を学習した。国立公文書館では、合衆国の独立宣言、憲法、人権宣言のオリジナルを見て、議会図書館では歴代大統領関連の多数の文献資料を確認した。米国史上最も傑出した大統領に関しては、ジェファーソン・メモリアル、リンカーン・メモリアル、フランクリンルーズベルト・メモリアルを訪問し事前学習で学んだ専門知識を深化させた。また米国が20世紀に世界戦略上対峙した主要な軍事行動に関しては、第2次世界大戦メモリアル、コリアウォーメモリアル、ベトナム戦争メモリアル、アーリントン国立墓地などを見学し、厳粛な歴史を認識した。

第4に、米国の超多民族性とmulti-cultural societyの理解を試みた。エチオピア系米国人、インド系米国人、パキスタン系米国人、アフガニスタンからの移住者との対話、またチャイナタウンやイスラミックセンター、ベトナム料理店、メキシコ料理店に行ったことから2人は米国の超多民族性を理解した。年間約70万人の移民を受け入れている米国のスケールの大きさに、2人はとても驚いていた。

第5に、米国の空間設計上の独自性の理解を深めた。6～8車線、広い歩道と街路樹、電線の完全地中化のハイグレード・ロード、ショッピングセンター、レストラン、レジデンシャルエリア等、全てが大きく設計されているlargenessというアメリカの空間設計上の特徴を2人は認識した。

総じて、事前学習で徹底して学んだ専門知識とストレートに関連する現実（Learning Knowledge-related Reality : LKR）を、多数確認したことが2人の知識や視野を深化、拡大させた。

帰国後は事後学習で、現地研修で知った膨大な「現実」に関することを調べた。また報告会では、多くの学生に、それまでの学習・現地研修等で得た知識・実体験を感動的に伝えることができた。学習蓄積が膨大であったためか、10,000字以上の修了レポートに関しては、大槻・早津とも迅速に作成することができた。

グローバルスタディの学習の終了に際して、大槻は「視野が本当に広がった。アメリカのスケールの大きさが分かった。また必ず行きます」と、また早津は「最初から最後まで圧倒されていました。本当に充実していた。グローバルスタディに参加してよかった」と感想を述べてくれた。



ーホワイトハウス：右から大槻翔理・早津裕ー



ージョージワシントン大学ー



—アメリカ商務省—



—ヒアリング—



ーヒアリングー



ーヒアリングー



ーヒアリングー



ー公開プレゼンテーションー

4.3 韓国・ソウル・アンドン・デグヘ！：2009年度実施「グローバルスタディ1」

2009年度には、「グローバルスタディ1（韓国コース）」を開講した。履修者は3年生の大槻翔理・木村亮太であった。

大槻翔理は2008年度の「グローバルスタディ」で、アメリカのワシントンD.C.エリアを視察していた。アジアへの理解を深めたいということと、アメリカの朝鮮半島戦略を考察したいという思いから参加した。木村亮太は、2年間に渡り語学科目である「韓国語Ⅰ」・「韓国語Ⅱ」を履修する中で、韓国語と韓国への興味を強めていた。ぜひとも韓国を自分の目で見て、2年間の韓国関連学習の集大成をしたいという気持ちがあった。

4月から7月にかけて事前学習を講義形式で徹底して行った。事前学習では以下のようなことを学習した。

第1に、世界の全体像を各エリアの歴史・現状・未来の視点から学び、その後に北東アジア・朝鮮半島の歴史に焦点を絞り緻密に学習した。第2に、「韓国経済の浮沈」として近年の韓国経済に焦点を絞り学んだ。第3に、韓国経済に最も影響力を有する財閥企業への理解を深め、第4に、韓国の政治について民主化の歴史・民主主義・大統領制という視点から探究した。第5に、朝鮮半島の安全保障問題を、南北問題・在韓米軍の抑止力等の視点から学習し、最後に、韓国の教育問題、韓国の未来について学習した。

表3：「グローバルスタディ1（韓国コース）」での事前学習の内容

No.	学習内容
1	世界の全体像の理解Ⅰ
2	世界の全体像の理解Ⅱ
3	北東アジア・朝鮮半島の歴史
4	韓国経済の浮沈Ⅰ
5	韓国経済の浮沈Ⅱ
6	韓国の財閥企業
7	韓国の民主主義Ⅰ
8	韓国の民主主義Ⅱ
9	韓国の大統領制
10	韓国の安全保障
11	韓国の教育問題Ⅰ
12	韓国の教育問題Ⅱ
13	韓国の未来

8月30日から9月5日にかけて、韓国への現地研修を行った。なお、研修には、長岡大学の市民対象公開講座の参加者9名が学生と一緒に同行した。以下はその様子である。

初日は、新潟空港から9時30分発の飛行機に乗り、約2時間後、韓国仁川（インチョン）空港に到着した。約2時間というフライト時間の短さに、大槻・木村は先ず驚いたようだ。まさに日本の「最隣国」という現実を実感した。

仁川空港では、同空港が北東アジアにおける「ハブ空港」の地位を不動のものにしている事実から、韓国の国家戦略の卓越性について学習した。大槻・木村にとって、韓国は初めてだったため、空港からソウル市内へ移動中のバス車内から眺める韓国の風景の全てが、新鮮なものに見えたようだ。昼食は、「ソルロンタン」という韓国料理（日本でいうとんこつスープにご飯、キムチといったとてもシンプルなもの）を食した。とてもあっさりしていておいしかったと語っていた。午後は宮殿と朝鮮時代の高級官僚の屋敷を見学した。そこでは事前学習で学んだ朝鮮王朝の歴史を復習する機会となった。その後、大統領府を視察した。2人は、議院内閣制と大統領制の

違いについて学習した。

2日目は、朝鮮半島の仏教に大きな影響を与えた僧侶が創建した浮石寺（プソクサ）を見学した。日本の寺と様相が異なる韓国の寺を訪問し、東アジアにおける仏教の多様性についての理解を深めた。その後、韓国の精神的首都といわれ、朝鮮半島儒学の本拠地であった安東（アンドン）を視察した。安東は、イギリスのエリザベス女王も訪れたほどのまさに「韓国的」な場所である。朝鮮時代の建築様式が今でも多く残っている河回村（ハフェマウル）、朝鮮時代の教育機関の一つである屏山書院（ピョンサンソウォン）を見学した。儒学（朱子学・陽明学）が韓国の近代化に与えた影響を学んだ。その夜は、山奥の宿泊所に滞在したが、そこで、韓国流の詩の朗読会を行った。

3日目は、氏族社会の本家の家を訪れ、伝統紙工房を見学した。その後、大邱（デグ）の漢方医院で東洋医学の真髄である鍼・灸を体験した。

4日目は、水原の世界遺産を視察した。ここでは、世界文化遺産の城を見学し、朝鮮時代の生活をのぞき見ることができる民俗村、朝鮮文化の宝物の陶磁器窯を訪れた。

5日目は、柳韓（ユハン）大学を訪問し、学生と交流した。その後、ソウル市内へ戻り、南大門市場を散策した。

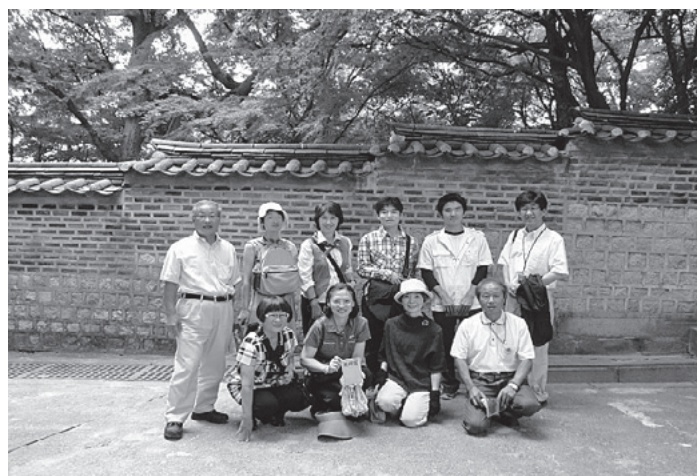
6日目は、北朝鮮との軍事境界線にある板門店（パンムンジョム）を訪問した。いわば「戦闘状態」の緊張感がはりつめた場所を視察し、大槻・木村はあらためて、国際政治の厳しい現実、安全保障の重要性を実感したようだった。板門店視察時には、特別の誓約書にサインするのだが、木村は、「自分の死を想定するような文書にサインしたのは初めてだった。非常に緊張した」と、驚いていた。

7日目は、朝鮮時代の暮らしがわかる博物館に入館した。2人は、韓国と日本の文化的共通点の多さを発見した。

帰国後の事後学習では、現地研修で理解した現実に関するディスカッションを行い、修了レポートをまとめていった。

大槻・木村にとって、「グローバルスタディ1（韓国コース）」での学習は大きなインパクトを与えたようだ。文明・文化の発展という一点で、いかに日本が歴史的に、韓国・韓半島からの恩恵を受けてきたか、まさに日本にとって韓国は文明・文化発展の大恩人の国であることを理解した。また、現実の韓国社会を見て、社会の雰囲気・制度等の点での日本との類似性を認識した。

さらに、特に板門店での視察から、国際政治の厳しい現実を知り、激動の国際社会のサバイバル・ゲームで日本が生き残っていくための道を考えたようである。



—昌徳宮（チャンドクン）：市民対象公開講座の参加者とともに—



—浮石寺：右から大槻翔理・木村亮太—



—柳韓大学：柳韓大学の学生と交流—



—柳韓大学長への表敬訪問—



—板門店：韓国軍憲兵—

既刊号のご案内

◆ **ブックレット①** _____
アタマは鍛えれば強くなる 長岡大学長 原 陽一郎

◆ **ブックレット②** _____
授業評価の実態 - 学生満足度の高い授業とは -
長岡大学専任講師 平野 順子

◆ **ブックレット③** _____
ニートとフリーター - 揺れる若者の選択 -
東京大学社会科学研究所 助教授 玄田 有史
ニート・フリーターとは何か - 資料で読む -
長岡大学教授 児嶋 俊郎

◆ **ブックレット④** _____
2005長岡大学「起業家塾」
長岡大学長 原 陽一郎 起業家塾担当教員 原田 誠司

◆ **ブックレット⑥** _____
大学とはどういうところか？
- 高校生の進路選択のために - 長岡大学助教授 石川 英樹

◆ **ブックレット⑦** _____
現代GPシリーズ1 情報力を鍛える
- 長岡大学における情報リテラシー・資格教育 -
長岡大学助教授 村山 光博

◆ **ブックレット⑧** _____
現代GPシリーズ2 長岡大学教育プログラム
第I部 現代GPとは何か - 選定の特徴を読む -
第II部 長岡大学キャリア教育プログラム

◆ **ブックレット⑨** _____
現代GPシリーズ3 長岡大学教育プログラムII
第I部 進化・発展する長岡大学の地域連携型教育研究
- 地域づくり主体としての大学へ -
第II部 学長インタビュー 地元企業との密接な連携教育で
ビジネス力、人間力のある人材を育成する

◆ **ブックレット⑩** _____
現代GPシリーズ4 第3回 長岡大学文化講演会特集
第I部 若者の社会人基礎力を鍛える - 若者自立の教育を考える -
第II部 パネルディスカッション ニート・フリーターを出さない 若者教育を考える

◆ **ブックレット⑪** _____
現代GPシリーズ5 2006長岡大学「起業家塾」
長岡大学長 原 陽一郎 起業家塾担当教員 原田 誠司

◆ **ブックレット⑫** _____
夢をかなえる長岡大学の教育プログラム
- 平成19年度、環境経済学科・人間経営学科がスタート -
長岡大学長 原 陽一郎 長岡大学教授 鯉江 康正

◆ **ブックレット⑭** _____
長岡大学教育プログラムIV
学生公募型人間力育成プログラム
- プロジェクト型自主活動とリーダー育成 -

◆ **ブックレット⑮** _____
長岡大学教育プログラムV
長岡地域産業活性化のためのMOT教育
- イノベーション人材養成プログラム -

◆ **ブックレット⑯** _____
現代GPシリーズ6 長岡大学教育プログラムVI
学生による地域活性化提案プログラム
- 政策対応型専門人材の育成 -

◆ **ブックレット⑰** _____
現代GPシリーズ7
いま、なぜ大学改革か …21世紀の新しい大学像は
長岡大学長 原 陽一郎

◆ **ブックレット⑱** _____
現代GPシリーズ8 第4回 長岡大学文化講演会特集
第I部 脳科学と教育 - 21世紀の新しい教育を考える -
第II部 講師との討論 21世紀の新しい若者教育をめぐって

◆ **ブックレット⑲** _____
現代GPシリーズ9 2007長岡大学「起業家塾」
起業家塾担当教員 原田 誠司

◆ **ブックレット⑳** _____
現代GPシリーズ10 学生による地域活性化提案プログラム
- 政策対応型専門人材の育成 - 平成19年度成果報告

◆ **ブックレット㉑** _____
現代GPシリーズ11 情報力を鍛える
- 長岡大学における情報リテラシー・資格教育 -
長岡大学准教授 村山 光博

◆ **ブックレット㉒** _____
現代GPシリーズ12 第5回 長岡大学文化講演会特集
若者の自立支援とキャリア教育
放送大学教養学部教授 宮本みち子

◆ **ブックレット㉓** _____
現代GPシリーズ13 学生による地域活性化提案プログラム
- 政策対応型専門人材の育成 -
平成20年度成果報告 (概要)

◆ **ブックレット㉔** _____
「米百俵の精神」と長岡大学
…長岡大学は「米百俵の精神」を受け継いでいきます。
長岡大学長 原 陽一郎

◆ **ブックレット㉕** _____
資格検定ガイドブック

◆ **ブックレット㉖** _____
学生の3つの就職力一体形成支援プログラム

◆ **ブックレット㉗** _____
現代GPシリーズ14 学生による地域活性化提案プログラム
- 政策対応型専門人材の育成 -
平成21年度地域活性化GPプログラム
学生による成果発表会 (概要)

◆ **ブックレット㉘** _____
現代GPシリーズ15 学生による地域活性化提案プログラム
- 政策対応型専門人材の育成 -
社会人基礎力育成グランプリ出場報告

◆ **ブックレット㉙** _____
現代GPシリーズ16 学生による地域活性化提案プログラム
- 政策対応型専門人材の育成 -
平成19年度～21年度活動報告 (概要)

◆ **ブックレット㉚** _____
長岡地域産業活性化のためのMOT教育
「イノベーション人材養成プログラム」
長岡大学イノベーション人材養成講座
平成19～21年度成果報告書

長岡大学ブックレット ⑳

【発行日】平成22年4月28日
【編集】長岡大学ブックレット編集委員会
【発行】長岡大学
〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8
TEL.0258(39)1600(代) FAX.0258(33)8792



**NAGAOKA
UNIVERSITY
BOOKLET**